

漢代西北辺境の研究
居延漢簡と京都大学
野口 優 (NOGUCHI Yū) *

1、居延漢簡発見の歴史

簡牘の研究は、20世紀初頭に始まる。1901年に、イギリスの探検家オーレル・スタイン Aurel Stein がタリム盆地南縁の尼雅遺跡から 3-4 世紀の中国晋代の木簡 50 枚を発見した。また、同年に、スウェーデンの探検家スウェン・ヘディン Svein Hedin が幻の湖ロプノール Lop Nur を探す探検の際に、楼蘭遺跡から晋代の木簡百二十枚余りを発見した。これが辺境におけるはじめての簡牘の発見である。続いて、1907年に敦煌一帯の調査を行ったオーレル・スタインが河西回廊に点在する漢代の烽燧遺跡から、七百枚余りの簡牘を発見した。この簡牘を 1912年にフランスの中国学者シャヴァンヌ Chavannes が解読し、その成果をもとに、翌年に王国維が『流沙墜簡』を著した。この著作が、後の簡牘研究の礎となる。

そして、1930年に、スウェン・ヘディンを隊長とするスウェーデン・中国の合同調査組織である「西北科学考察団」によって、現在の内蒙古自治区と甘粛省にまたがるエチナ川流域の漢代烽燧遺跡から、簡牘一万枚あまりが発見された。いわゆる居延漢簡である。この居延漢簡の釈文・図版の公刊及び研究に対する苦難は、次章で論ずる。

辺境漢簡の次なる大きな発見は、1972～73年の居延新簡の発見である。1960年代に勃発した文化大革命の混乱もようやく鎮まり始めた時期に、居延漢簡が発掘されたエチナ川流域において漢代遺跡が再度発掘された。その結果、二万枚弱の簡牘が新たに発掘された。今次の調査では、軍政機構の候官及び交通の要所である関所が重点的に発掘された¹。候官出土の約八千枚は 1990年に釈文が、1994年に図版が公刊された。関所出土の一万二千枚は、2011年年末から釈文・図版が『肩水金關漢簡』として順次公刊され、2015年12月時点で、全5冊中3冊が刊行されている。

加えて、1999年～2002年に三度目のエチナ川流域における漢代遺跡の調査が行われた。今回は 1972・73年時点で発掘ができなかった烽燧遺跡を中心に発掘が行われた。その結果、約七百枚の簡牘が発見された。いわゆる額濟納漢簡である。額濟納漢簡の釈文と図版は 2005年に『額濟納漢簡』として公刊されている。

ただし、2015年12月現在になっても、発掘されたものの未だ公表されていない辺境漢簡は依然として多数残されている。その未公表の簡牘が公表されれば、さらに研究が深化する可能性が高い。加えて、戦後に至り、古墓や古井戸から数多くの簡牘が発掘され、その総数は十五万枚を大きく上回る。このため、簡牘を主要史料として駆使することによって、従来の歴史像とは異なる新たな歴史像の確立が期待される。

2、1930年発見の居延漢簡研究の苦難

1930年に居延漢簡が発見された後すぐに、北京大学・中央研究院・故宮博物院で簡牘の解読が開始された。しかし、1930年代末に勃発した日中戦争により研究は中断を余儀なく

* 京都大学・非常勤講師・文学博士。

¹ 候官とは、烽燧を統括する軍政の重要拠点である。民政機構の県に相当する。

された。その後、四川省に疎開した中央研究院の学者勞幹氏が居延漢簡の解説と研究を行った。その結果、1943年に居延漢簡の釈文を四川省南溪で『居延漢簡釈文之部』として公刊した。そして1944年に、解説結果を用いた漢代制度の研究成果として『居延漢簡考釈・考証之部』を公刊した。日中戦争終結後、1946年の国共内戦によって、勞幹氏は台湾に移住する。その後も氏は、精力的に居延漢簡を研究し、その研究の多くは『勞幹學術論文集甲篇』（1976年）に集大成されている。簡牘の図版は、1957年に台湾の中央研究院歴史語言研究所より『居延漢簡図版之部』が公刊され、ようやく1930年出土の全ての居延漢簡の写真が発表された。簡牘の図版だけ発表が遅れたのは、日中戦争、国共内戦を経て、二度にわたって図版の製版が焼失したためである²。

ただし、居延漢簡の研究にはなお大きな問題が存在した。多くの簡牘の出土地が不明であったことである。居延漢簡の大部分は軍政・行政文書である。そのため、ある出土した文書がその出土した機関で作成された控えなのか、もしくは他の機関から送られてきた正本なのかということを判別するために、出土地の情報は欠かせない。出土地が分からないということは、文書の移動・保存の状況がわからないということである。この問題は、1959年に北京の中国科学院考古研究所より『居延漢簡甲篇』が出版されたことにより³、ある程度解決された。全出土簡のうち、約三分の一の出土位置が判明したのである。全ての出土簡の出土位置が判明するのは、1980年のことである。同年に、社会科学院考古研究所より『居延漢簡甲乙編』が出版されたためである。つまり、1930年に出土した居延漢簡は、発見後50年にしてようやく全ての簡の出土地が判明したのである。

また、居延漢簡そのものは、日中戦争の戦禍を避けるため、1937年に香港に輸送された後、1940年に米国に輸送され、以後25年間、米国の国会図書館で厳重に保管された。その後、1965年に台湾に返還された⁴。現在、居延漢簡は、台湾の中央研究院歴史語言研究所の史料庫に保管されている。

3、京都大学人文科学研究所の居延漢簡研究班における居延漢簡の研究

勞幹氏の『居延漢簡釈文之部』は1951年に日本にもたらされ⁵、その入手を機に、京都大学人文科学研究所において、森鹿三を班長として居延漢簡の共同研究班が組織された。この研究班が日本における居延漢簡研究の嚆矢となった⁶。本研究班に参加した研究者は、森鹿三を除いて、藤枝晃、米田健次郎、大庭脩、永田英正、イギリスの中国学研究者マイケル・ローウェ Michael Loewe などである。彼らの研究は、当初、図版を見ることができなかったために、勞幹氏が解説した釈文に依拠せざるを得ず、勞幹氏の解説を批判・検討することができなかった。つまり、文字の大きさ・文字の書かれる位置・筆跡の識別・墨の濃淡など古文書を研究する上で最も基礎的な情報が得られなかったのである。加えて簡

² 居延漢簡研究の苦難の歴史については、富谷至『竹簡・木簡が語る中国古代：書記の文化史』（岩波書店、2003年）を参照のこと。

³ 考古研究所は、1977年に社会科学院が設立されて以降、社会科学院に所属する。

⁴ 居延漢簡の香港・米国への輸送について、邢義田氏の「傅斯年、胡適与居延漢簡的運美及辺台」（同『地不愛宝：漢代的簡牘』、中華書局、2011年）を参照のこと。

⁵ 南溪で1943年に出版された『居延漢簡釈文之部』は石印本である。同書は1949年に上海商務印書館より排印本で出版された。京都大学人文科学研究所の研究班では、排印本が主として用いられた。

⁶ 京都大学人文科学研究所における居延漢簡研究については、永田英正『居延漢簡の研究』（同朋舎、1989年）の序章を参照のこと。

の出土地も判然としない状態から研究を始めなければならなかった。このことは、簡牘の移動について、全く検討する手がかりがないことを意味する。その文書が正本か副本もしくは草稿かなどという文書の性質を決定する上で、最も重要な情報が得られないのである。しかし、そのような困難な研究状況の中で、『東洋史研究』第12巻第3号における「居延漢簡の研究」特集号（1953年）⁷や藤枝晃「長城のまもり：河西地方出土の漢代木簡の内容の概観」（1955年）⁸など、現在においても参照されるような研究が数多く生み出された。そして、居延漢簡の研究に大きな転機が訪れたのが、1950年代末のことである。1957年の『居延漢簡図版之部』の出版と1959年の『居延漢簡甲篇』の出版が研究を進展させたのである。この両書の出版で、簡牘の形式・書式、文字の墨色の濃淡などの状況が明確となり、古文書学的研究方法を用いて居延漢簡を研究することが可能となった。京都大学人文科学研究所の研究班では、森鹿三「居延漢簡の集成：とくに第二亭食簿について」（1959年）や「居延出土の卒家属廩名籍について」（1960年）などの研究が発表された⁹。また、断簡の中から、漢代の詔令を復元し、詔令の作成・伝達過程を明らかにした大庭脩「居延出土の詔書冊と詔書断簡について」（1961年）も図版・出土地が発表されて以後程なくの時期に発表されている¹⁰。

そして、居延漢簡の古文書学的研究にとって極めて重要な研究が1960年代末に発表された。マイケル・ローウェ Michael Loewe 氏の『Records of Han administration』（1967年）である。ローウェ氏は出土地ごとに簡牘を書式ごとに分類し、筆跡などを手がかりに冊書を復元することに努めた。氏の研究により、居延漢簡の古文書学的研究は重要な基礎を得た。氏の研究を更に発展させたのが、永田英正氏の研究である。永田氏は、ローウェ氏の文書書式の分類をさらに体系的に分類した。そして、その分類をもとに出土地の官署としての職掌・機能を復元した。最終的にその書式分類に対する詳細な説明を加えた上で、上記の研究成果を『居延漢簡の研究』（1989年）として出版した。簡牘の図版が出版され、出土地が判明した1950年代末以降、両氏の研究により、居延漢簡の古文書学的研究が確立されたといえる。

そして、居延漢簡の研究は、再び大きな転換点を迎えた。1990年に1972～1973年出土の居延新簡二万枚のうち、候官出土の八千枚の釈文が公刊されたのである。なお、図版は、1994年に公刊された。1972年出土の居延新簡には、冊書も多く含まれており、その冊書を用いることにより、漢代辺境における裁判・軍事制度の実像の解明が進んだ。

さらに、2005年の『額済納漢簡』の公刊と2011年から始まる『肩水金閼漢簡』の公刊が、より居延漢簡研究を深化させている。

以上の辺境漢簡の増加を背景に、居延新簡の出土以降、京都大学人文科学研究所の富谷至教授が再び居延漢簡の研究班を組織し、居延漢簡中の語彙・事項の考証を行った。その

⁷ 『東洋史研究』第12巻第3号の内容は以下の通りである。森鹿三「居延漢簡研究序説」、大庭脩「漢代における功次の昇進について」、伊藤道治「漢代居延戦線の展開」、米田賢次郎「漢代の辺境組織：燧の配置について」、岡崎敬「漢代辺境兵士の被服について」、吉田光邦「弓と弩」、日比野丈夫「漢簡所見地名考」、川勝義雄「居延漢簡年表」。

⁸ ユーラシア学会編『遊牧民族の研究：ユーラシア学会研究報告』（自然と文化／自然史学会編：別編2）に収録されている。

⁹ 森鹿三氏の研究は、『東洋学研究 居延漢簡篇』（同朋舎、1975年）に集約されている。

¹⁰ 大庭脩氏の研究は、『秦漢法制史の研究』（創文社、1982年）及び『漢簡研究』（同朋舎、1992年）に集約されている。

成果は 2015 年 3 月に『漢簡語彙：中国古代木簡辞典』及び『漢簡語彙考証』として出版された。

京都大学が中心となって大きな成果を挙げた古文書学的研究であるが、もちろん成果を上げたのは日本だけではない。近年になり、中国・台湾でも大きな研究業績が現れている¹¹。今後も日本・中国・台湾・その他の国で活発な研究交流がなされ、研究が進展していくに違いない。

	日・中・台事件史	居延漢簡	居延漢簡公刊関係
1901	義和団事件の終結	オーレル・スタインにより ニヤ遺跡より晋簡発掘 スウェン・ヘディンにより 楼蘭遺跡より晋簡発掘	
1907		オーレル・スタインにより 河西回廊より漢簡発掘	
1911	清帝国の滅亡		
1912	中華民国の成立		王国維「簡牘検署考」(京都にて)
1914			王国維『流沙墜簡』
1930		西北科学考察団により 居延漢簡が発掘。	
1937	盧溝橋事件勃発(7月)	居延漢簡、香港へ(年末)	
1940		居延漢簡、香港から米国へ	
1941	太平洋戦争開戦 日本軍による香港占領		
1943			劳幹『居延漢簡釈文之部』(石印本)
1945	第二次世界大戦の終結		
1946	国共内戦勃発		
1949	中華人民共和国の成立		劳幹『居延漢簡釈文之部』(排印本)
1953		米国と台湾の返還交渉	『東洋史研究』居延漢簡特集号
1959			考古研究所『居延漢簡甲篇』
1965		居延漢簡の台湾返還	
1966	文化大革命の開始	台湾による居延漢簡点検	
1967			マイケル・ローウェMichael Loewe “Records of Han administration”
1972		居延新簡の発掘	
1975			森鹿三『東洋学研究 居延漢簡篇』
1976	文化大革命の終結		劳幹『劳幹学術論文集甲篇』
1977	社会科学院の設立		
1980			考古研究所『居延漢簡甲乙篇』
1982			大庭脩『秦漢法制史の研究』
1989			永田英正『居延漢簡の研究』
1990			『居延新簡：甲渠候官与第四燧』
1991			大庭脩『漢簡研究』
1994			『居延新簡：甲渠候官』
1999		額濟納漢簡の発掘	
2005			『額濟納漢簡』出版
2011			『肩水金閼漢簡』出版開始
2015			『漢簡語彙：中国古代木簡辞典』

¹¹ 例えば、中国では、李均明『秦漢簡牘文書分類輯解』(文物出版社、2009 年)が、台湾では、邢義田『治国安邦：法制、行政与軍事』、『地不愛宝：漢代的簡牘』(ともに中華書局、2011 年)が出版された。その他にも、中国・台湾で多数の研究が出版されている。